

# 私のおすすめ この1冊!

地域歯科医院による

## 有病者の 病態別・口腔管理の実際

—全身疾患に対応した口腔機能の維持・管理法と歯科治療—

菊谷 武・阪口英夫 編著

A4判・120頁・定価4,725円(税込)

2011年9月19日 ヒョーロン・パブリッシャーズ刊

米山 武義

(静岡県駿東郡/米山歯科クリニック)

人は、物理的(物質的)な世界と精神的な世界の間で毎日、揺れ動きながら生きている。栄養摂取はその人の活動の源であると同時に、精神を安定化させる最も重要な営みの一つである。それゆえ口から食事ができなかつたら、どれほどその人の体を衰弱させ、心を荒廃させることか、これまで要介護高齢者の食の現場を見て、強く感じていることである。

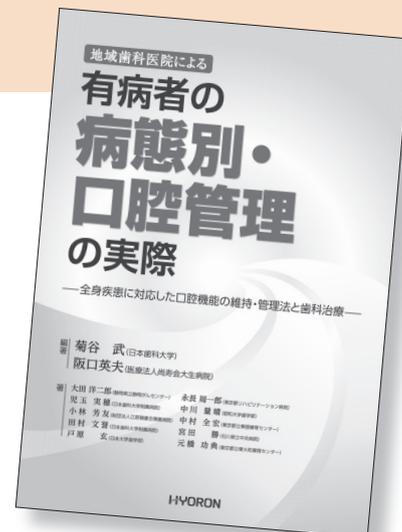
さらに昔から「口は健康(病気)の入り口、魂の出口」と言われるように、口は食べることだけではなく生命や社会的生活を営むために根本的な役割を持ち、そして人間の尊厳とも深く関わっている。しかし、広く国民の中で口が守られているか、また専門職が真剣に守ろうとしているかという疑問が残る。歯科医師過剰時代と言われているが、診療室から一步出て歯科医療の光の当たっていないこの分野に、多くの歯科医師が関わらねばならないと思う。

本書は有病者に対する具体的なアプローチを記した貴重な指南書であり、贅肉をそぎ落とし、ずばり障害や全身疾患を持つ患者に地域の歯科医院がどのように対応すべきかを、病態別にまとめたものである。編者の一人である菊谷 武先生は、「歯科的治療によって“歯科的治癒”を

目指すばかりではなく、患者の現状に応じて現在の口腔機能を維持するための取り組みが求められ、“口腔機能を管理する”といった視点が必要となる」と記している。ここに本書の目指す方向が示されている。

編者および著者はどなたもそれぞれの分野のエキスパートであるだけでなく、有病者の側に立って何とか良くなって欲しい、何とか助けたいと願う心が強く感じられ、久々に良書に巡り合えた。

各病態別の項目について言えば、「障害児・者の口腔管理」で元橋功典先生が書かれている「障害児・者も健常児・者も対応は一緒であり、特別な治療をしているわけではない」ということ、「妊産婦・新生児の口腔管理」で田村文誉先生・児玉美穂先生が書かれている「本来、妊娠・出産は喜ぶべき出来事として、もっとバックアップしていかなければならない」ということには、まったく同感である。また、「がん患者の口腔管理」を執筆された大田洋二郎先生は、現在最も注目されている口腔外科医であり、その業績のすばらしい点は、がんセンターに口腔管理のシステムをしっかりと根付かせたことである。本項では手術治療時から、がん緩和医療の口腔ケアまで、



口腔管理の実際を述べている。その他にも、永長周一郎先生、宮田 勝先生の「成人有病者の口腔管理」、小林芳友先生の「精神疾患患者の口腔管理」、中川量晴先生・戸原 玄先生による「口腔機能低下患者の評価法と訓練法」等、それぞれに的を得た説明で、口腔感染予防、摂食・嚥下リハビリテーションの最前線にある歯科開業医として、心しておかねばならないことばかりであった。

編者である阪口英夫先生は「担当ケアマネジャーや介護施設の職員らに口腔ケアの重要性が知られるにつれ、歯科治療を施すより口腔ケアを提供することが重要であることに理解を示す専門職が増えてきている」と記しているが、私も同じことを経験し、感じている。誤解すべきではないが要介護高齢者の生活を見ての判断であると考えられ、この点に歯科医師は気付かねばならない。

本書の中で一貫して流れている共通の価値観は、「治療を施すよりも口腔内の快適さやその方の尊厳を守ることに重点を置いた口腔管理」である。ともすると誤解されがちな表現であるが、現場の看護師や介護者が歯科に望む核心である。本書を通してこのことが歯科界で理解が進むことを、切に望むものである。